

< 2004年7月 >

「兵は凶器なり」(27)

15年戦争と新聞メディア

1935 - 1945

二・二六事件でトドメを刺された新聞

前坂 俊之

(静岡県立大学国際関係学部教授)

一九三六年(昭和 11) 2月 26日。

その日未明、雪を踏みしめて、皇道派青年将校二十人に率いられた反乱軍約千四百人は首相官邸、内大臣私邸、侍従長官邸、蔵相私邸、教育総監私邸などを次々に襲った。

斎藤実内大臣、高橋是清蔵相、渡辺錠太郎教育総監は殺害され、鈴木貫太郎侍従長は重傷を負った。岡田啓介首相、牧野伸顕前内大臣は危機一髪で難を逃れた。

反乱軍はさらに陸軍大臣官邸、陸軍省、参謀本部、警視庁も襲撃した。新聞社では、『東京朝日』が襲われ、活字ケースなどをメチャメチャに壊されたのをはじめ、『東京日日』（現『毎日新聞』）『報知』『国民新聞』『時事新報』にも反乱軍は現れ「決起趣意書」を手渡した。戒厳令が敷かれ、二十九日には『兵に告ぐ』の放送とビラがまかれ、午後、反乱部隊は全員帰順した。

「日本を震撼させた四日間」であった。

この日、東京日日新聞の社会部記者・鈴木二郎が宿直室でフトンにもぐり込んだのは午前三時ごろであった。

外は雪が積もり、底冷えのする寒さで、一パイひっかけて他の宿直員2人、写真部員2人の計四人でタタミとそれを囲む形の二段ベッドで横になった。

しばらくしてまくら元の電話が鳴った。反射的に時計をみると、午前四時半を少し回っていた。

「いま首相官邸が襲われている。軍隊が襲っている！」

電話の主は興奮しており、おそろしく早口でしゃべり、一方的にガチャンと切った。鈴木記者は一瞬「また、いたずら電話か？」と思いつつも真に迫った声に起き上がり、白井鑑三写真部員をともない自動車で官邸に向かった。

日比谷公園のはずれにさしかかると、当時の拓務省(いまの東京地裁付近)と堀端を結ぶ道路に銃を持った兵士十数人が並んでいた。

自動車でそのまま「新聞社だ」と叫び、通り抜けようとしたが、ピストルを構えた軍曹が「新聞社もクソもない！ 帰れ」と血相をかえて怒鳴った。二人はそこで初めてただならぬ大事件発生を知り「革命だ！」と仰天して、社へ引返した。



その間、東日編集局には反乱軍が襲撃した各地の情報、大官の悲報が矢継ぎ早に入り、社内は騒然となっていた。(1)

午前六時十分には、東京から専用電話で名古屋、大阪、門司の各本社へ「ただいま東京では五・一五事件以上の大事件が起こっている」と急報された。

三本社の当直員は直ちにその速報で号外を出した。

午前八時すぎに内務省から「記事掲載禁止」の通達が出たが、すでに大部分の号外

は配達後であった。

特に、九州では内務省の通達は福岡県当局まで二時間かかった。これを見越して毎日西部総局では各支局に手配して逸早く号外を発行、通達が届いた時は一枚の号外もなかった。号外戦では毎日が完勝した。(2)

『朝日』はどうだったのか。

『東京朝日』への事件の速報は、午前五時すぎに整理部貞から北野吉内整理部長へもたらされた。

宿直の社会部員四人は寝入りばなを同五時半ごろ、社会部長からの緊急電話でたたき起こされた。

電話と電報によって、全部員に一齐に非常招集がかけられた。

緒方竹虎主筆には宿直の磯部祐治記者から「斎藤内大臣、岡田総理、高橋蔵相がやられました」と連絡が入った。

緒方は高橋を「高石(東京日日新聞主筆・高石真五郎)と聞き違えた。「高石がやられたのなら、当然自分もやられるに違いない」と覚悟し、いろいろ対策を思いめぐらしながら車で社に向かった。本社に着いてみると、「高石」ではなく、高橋蔵相の間違いとわかった。

反乱軍部隊はトラック三台に乗って午前九時すぎに東京朝日本社付近に現れ包囲した。反乱軍将校がピストルを手に一階の受け付けに面会を求めてきた。緒方が対応した。(3)

「……守衛が上がってきて『今、反乱軍の将校がやってきて社の代表者を出せといっています』という。『いよいよやって来たな』と思って、そばに美土路昌一君らがおったが『僕が代表者だから会おう』と答えた。

大阪に電話をかけて『これが最後の電話になるかもしれぬ』と告げた。

編集局から出ようとするとう島越雅一君がエレベーターのところまで追ってきて『大丈夫か』と聞いた。社内の人が騒いでケガ人など出しては困ると思って、『静かにするよ』と伝言してエレベーターに乗った。

降りれば殺されると思って、ネクタイを直して降りると一段と低くなった所に中尉の肩章をつけた将校が眼を真赤にして立っている。

『こいつだな』と思って、『私が社の代表者だ』と名刺を出した。ところが、ちょっと会釈するような恰好をみせたので、これなら大したことはないなと感じた。

見ると、足を踏ん張って右手に拳銃を持っている。腰のあたりをゴソゴソやっていたから気味わるかったが、無言のまま双方が対峙した。非常に長い時間のように思われたが、二十秒か三十秒くらいなものだろう。

……その将校はいきなり、右手を高くあげ天井を見ながら、大声で『国賊朝日をやっつけるのだ』とどなった。

それで『ちょっと待ってくれ、社には女も子供もいるんだから、それを出すまでは待ってくれ』と言ったら、『すぐ出せ』といった。

緒方が三階の編集局に戻ると、「生きていたのか」と他の幹部が喜んで飛んできた。緒方は全員に退去するよう指示した。

兵隊たちはその後、どんどん上がってきて工場の活字ケースなどを倒して引き上げた。輪転機のある部屋はヨロイ戸が下りていたため、無事だった。

被害は軽微だった。活字ケースは多少破壊されたが、夕刊発行に支障はなかった。しかし、反乱軍を刺激することを恐れて、夕刊発行は見合わされた。

緒方が編集責任者として銃口を恐れず、毅然として反乱軍と対決したことは、『朝日』ではのちのちまで語り草となっている。

二・二六事件と新聞というと、いつも緒方の毅然とした態度が引き合いに出される。たしかに、体を張って『朝日』を守った緒方の態度は十分評価に値するが、言論においてはどうだったのか。同じように体を張って抵抗したのだろうか。

残念ながら、軍縮キャンペーンの先頭に立ち、軍部の横暴と独走に批判の論陣を張っていた『朝日』の自由主義の伝統はこの銃口の前に沈黙したのである。

この反乱軍の決起に対して、内務省警保局は午前八時すぎ、記事掲載の一切禁止

を電話で通告した。憲兵隊本部も各社幹部を出頭させ「当局公表以外は絶対に掲載を禁止する。もしも、多少でも侵すものは厳罰を以て報いる」ときびしく警告した。

一方、反乱軍将校は午前九時前に朝日を皮切りに電通(日本電報通信社)、東京日日、国民、報知、時事新報の各社を回り、決起趣意書の掲載を要求した。

社によっては社の代表が決起趣意書を受けとり、社員を非常招集し、趣意書を読み上げ「今後はこの方針に従って新聞を編集する」と声明したところがあるなど、状況は混乱を極めた。

『東京朝日』は夕刊を混乱を避けるため休刊し、大部分の新聞はこの未曾有の大事件について報道しなかった。

その中で、敢然と報道禁止に挑戦し、当日の夕刊で事件の概要を報じたのは、『東京夕刊新報』だけであった。(4)

第 = 阿トップ四段抜きで、「少壮軍人クーデターを行い殺気惨澹の帝都、蔵相、重臣暗殺の報に人心悔々たる不安の二月二十六日」の見出し。

さらに中五段抜きで「将兵一千名決起、重臣閣僚を一斉襲撃」の見出しが躍っていた。午後四時ごろ、ようやく発売禁止となり、スタンドから押収されたが、その間、飛ぶように売れた。

『報知』は反乱軍の決起趣意書を副社長の指示でゴシック活字で全文を一面に掲載、あとで削るように命令され、白紙のまま発行した。『時事』は夕刊一面トップで「株式取引所の立会休止」を報じ、重大事件が起こったことを暗示した。

この日、陸軍省が初めて事件の概要を公表したのは発生以来約十三時間が過ぎた午後八時十五分のことであった。この間、さまざまなウワサや流言蜚語が飛びかい「東京は全滅する」「戦争が始まった」「荒木と真崎が反乱軍を指揮している」といった「怪情報」が東京中に広がり、市民は不安にかられた。

特に、大事件が起こっているのに、新聞が一切報道をしないことが一層人心を不安にさせ、地方の動揺ははなはだしかった。(5)

事件勃発とともに各新聞社は憲兵隊本部へ押しかけたが、事件に関するニュースは

すべてラジオで発表され、新聞、通信はあと回しにされた。

戒厳令は二十七日未明に布かれ、軍人会館に戒厳司令部が設置されたため、各社はここに記者を送ったが、重大ニュースの発表はますますラジオ専用となり、ラジオさえ聞いていれば新聞は不用という状態に陥ってしまった。

三重苦には陥ってしまった新聞

しかも、戒厳司令部は新聞への取り締まりはきびしく、ラジオの公表を速記して新聞に一つ一つそのまま掲載するのはいいが、それ以外は禁止した。

速報性や報道でもラジオに抜かれ、真相や事実は報道禁止で書けず、暴力の前に批判の論調も恐ろしくて押さえざるを得ない、という三重苦に新聞は陥ってしまったのである。(6)

四日間の混乱ぶりを日を追ってみよう。(7)

・ 二月二十六日

「二十六日午前の某事件により新聞界はまさに大混乱を呈した。何れも出先官庁各記者との連絡は絶え、各方面から入る情報はどれも部分的で大要を伝えず、一方ニュース報道は危険にさらされ、官庁或は取引所方面の機能停止と同様、あたかも全機能が活動できないかと思われたが、午後に至って相その全貌が判然し、当該事件に関連せざるニュースは敢えて危険なしとして、この日遂に印刷組版不能に陥った東朝を除き、ともかくも定刻には夕刊を出すことが出来た。

この夕刊は東京大勢、やまと等比較的早くスタンドに回したものは一部五銭で奪い合いで需められ、各紙もこれに続いて飛ぶように売れた。刻々移る情勢の変化により、各報道機関はぎ然自失して、殆んど為すところを知らなかった」

・ 同二十七日

「依然として、内閣、警視庁、内務省等との連絡は甚だしく不便で、各方面からの情報も多分に流言を織り交ぜている一方、その公表以外の掲載ニュースは極度に制限せざるを得ない状態にあり、報道上の危険は略々、除き去ったが、これ等の精神的に受けている圧迫は依然として暗たんたるものがある。

二十七日午後六時半ごろ、各官庁詰の記者クラブはほとんど引上げるのやむなきに至った。これは戒厳令下万一生命の危険に脅かされる場合、各当局の新聞記者に対する生命保証は望めないことと、本社側もこの危険を知って早く引上げと自由行動を命じたためである」

・ 同二十八日

「東朝、東日、読売の三社は二・二六事件に関して極めて慎重な態度を以て臨みつつあるが、特に報知、時事、国民等は或は号外を乱発し、或は写真ニュースに活躍を窓にしつつあるに拘らず、以上の三社は極力これを避け、出来得る限り平静な態度を持して臨みつつあり、これは都下三大新聞一致の態度として大いに注目される」

・ 同二十九日

「想起する四日間にわたっての混乱に於ける報道機関の動静、昭和新聞史上に特筆すべきである。戒厳令による報道の制限下に帝都を中心の各社は実に百時間にわたって文字通り不眠不休であった。

然して、各社第一線に生命の保全期し難き危殆線上に獲たる貴重なニュースは戒厳令のために滅却され、また半減四分さるる結果となった。全報道街は殆んど挙げて当局の欲求するが如き『きょう限り慎重に』との旨をよく体して、この重大事件に直面して終始したこともまた特筆すべきであろう」

初めて体験するクーデター、戒厳令に右往左往する新聞のようすが部分的ながら浮き彫りになってくる。

こうした新聞界の狼狽ぶりのなかで、当時日本を代表していた「朝日」「毎日」「読売」はどう対応したのだろうか。

それまで半死の状態であった言論の自由は完全にトドメを刺されたのである。

一九三二(昭和七)年に起きた五・一五事件では『大阪朝日』や菊竹六鼓の『福岡日日新聞』(現『西日本新聞』)の激しい軍部批判、テロ攻撃の社説が掲載され、新聞の抵抗が一部にはみられた。

しかし、五・一五事件で軍部批判を真正面からやった菊竹六鼓の『福岡日日』も

二・二六事件では大きく後退してしまった。

論説は三月二日まで事件について全くふれなかった。三月三日に初めて、菊竹六鼓が「強力内閣のその力、何れに求むるか」で取り上げたが、冒頭で読者に謝罪しており、五・一五事件でみせた気迫はすでに消えうせていた。

「本欄は二十七日以来今日まで、ほとんど怠業の連続である。熱心なる読者諸公はなんという醜態ぞ、と眉をひそめたであろう。その通りである。

けれども、それは法規の止むを得ざる結果でもあった。多少はあるいは大いに卑怯も手伝ったであろう。それやこれやの煩悶悞悩の裡に、時局は渦をなして流れ来たりまた流れ去った。そして、新聞の『機会は一瞬にして次から次へと失われ終った。(8)

呆然として、今さら読者諸公にこふするものはなはだしきを思わざるを得ない」

五・一五事件でみせたペンの抵抗はついにみられなかったのである。

(つづく)

<引用資料・参考文献注記>

- (1) 『毎日新聞百年史』 毎日新聞百年史刊行委員会編 1972年刊、183 - 184P
- (2) 『同上』 18P
- (3) 『朝日新聞の九十年史』 朝日新聞社社史編集室 1969年刊、377 - 378P
- (4) 『ある時代の鼓動 - 二・二六から安保まで』 山本文雄 新泉社 1977年刊 47P
- (5) 『同上』 47P
- (6) 『日本マス・コミュニケーション史』 山本文雄 東海大学出版会 1970年刊、161 - 162P
- (7) 『日本新聞年鑑 昭和十二年版』 新聞研究所 一九三六年、19 - 22P
- (8) 『六鼓菊竹淳 - 論説・手記・評伝』 木村栄文編著 一九七五年 558P